

## 40 一枚の写真——明治23年お雇い外国人教師スクリバの 第一医院外科若き医局員9人のその後

高橋 薫<sup>1)</sup>，高橋日出雄<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> タカハシクリニック，<sup>2)</sup> 高橋クリニック

ここに一枚の写真がある。本郷中黒實写真館「明治二十三年三月七日医学士谷口長雄君松山病院赴任ニ就キ第一医院外科助手等俱ニ撮影ス」の記述。写真の9人（明治21～23年卒業）は、日本の医学を牽引した先達である。写真の持ち主関場不二彦は、理堂撰集外科医局勤務の回想によると「明治23年1月より医科大学第二医院の外科医局……見習といふ資格……「先が聞えて」空位が無く、三月に初て無給助手を貰った。……八月になって第一医院外科医局に勤務したらと佐藤先生（佐藤三吉）から温情溢るる談があり……」と記述。後の東京帝国大学付属病院となる第一医院外科に明治23年9月入局しスクリバの下、研鑽を積み明治24年10月濃尾大震災時にスクリバと共に愛知黒田村にて救援活動する。明治25年北海道に渡り札幌医師会・北海道医師会の初代会長となる。

二人目の送別される谷口長雄は、第一医院を経て愛媛松山病院赴任、その後熊本県立病院から明治29年熊本医科大学の前身熊本医学専門学校校長を務め後に初代熊本大学学長となる。

三人目の筒井八百珠は、土肥慶藏の鴉軒先生遺稿によれば筒井八百珠君の在官25年を賀すの中で「……千葉医学専門学校教授を経て……岡山医学専門学校長に勅任せられ岡山縣病院長を兼任し……我学界に效せし功労や実に甚大なり、……スクリバ氏に師事して外科を修め……後皮膚病黴毒學の講座を兼擔し明治32年官命により独逸に留学……。明治34年帰朝・色素性乾皮症の研究の如き君が実に先鞭を著くる所なり」とあり、岡山大学の基礎を築く。

四人目の伊藤隼三はベルン留学から帰朝。医局日誌には土肥が送る伊藤学士帰郷と題した文の中で「明治24年9月23日は是の日を以て余が外科医局当直の終結となす。茲に医局万歳を祈る。」更に「巨面高顔なれども、人を射るの炯眼あるにあらず。……粗野豪放なるかと思えば、緻密周到。」と人柄を述べ、医局日誌9月24日の近藤次繁は「予は伊藤君当直終結の弁に対し、吾らの敬愛する伊藤君万歳万歳万々歳を三唱す。」明治33年京都帝国大学教授、38歳の若さで大学付属病院長。更に医学部長、帝国学士院会員となる。

五人目の甲野泰造は、第一医院外科入局。長岡甲野病院開設。明治24年5月6日の医局日誌には、「此日甲野泰造来る。昨年本月外科医局を去りてより恰も1年となり。面白き情話あるべきなり、医局員歓迎。」翌日5月7日の日誌に「須（スクリバ）師登院。甲野学士の為に（ツベルクリン）注射患者を回診教示す。」

六人目の和辻春次は、明治38年京都医科大学耳鼻咽喉科初代教授に就任し京都帝国大学名誉教授から昭和3年前身大阪女子高等医学専門学校校長から関西医科大学初代校長となる。東京慈恵医院医学校耳鼻咽喉科学教授金杉英五郎、東大岡田和一郎教授らと明治26年日本耳鼻咽喉科学会創立。

七人目の丸茂文良は、昭和11年日本医史学会スクリバ先生追悼の夕べによれば、関場は「スクリバ先生は機に臨み能く助手を招待され……。葡萄酒やビールが出て宜い加減に酔を催うす頃になりますと余興が始まる……。その時分に丸茂文良君が一番に興味と智慧を有し、滑稽に洒落に到らざるなく又は講談落語家の真似も出て毎回色々の余興……。」と丸茂の一面を記述、済生学舎に転じ、世界初の頭部レントゲン撮影に成功。

八人目の真崎又吉は、明治21年の帝国大学年報によれば「医科大学卒業生真崎又吉の同学無給助手に採用願を議し許可することに決す」。医局日誌には関場が有給助手時代「田代・真崎を筆頭とし伊藤隼三、谷口長雄、筒井八百珠 余（関場）が同僚……。」と述べ、後熊本県人吉病院長に赴任。明治33年夭折。青山霊園で北里柴三郎とスクリバの側に眠る。

九人目の田代義徳は、明治30年日本外科学会設立。後の東京帝国大学教授（整形外科）でスクリバ十哲の筆頭である。（写真は、札幌市 弘南堂書店店主ご厚意による）